恋愛小説

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋 愛 小 説

【コード】

N2432U

【作者名】

凧

【あらすじ】

短編集。甘いのから切ないのまで色々。

年齢、世界観、ジャンルも様々ですが恋愛中心です。

前書きにその話のキーワードを入れていますので、参考にしてください。

冷たい指 - 1 (前書き)

1周年リクエストより。

(R15 / 切ない / 体の関係 / ハッピーエンド)

冷たい指 - 1

雨の音が聞こえた。

世間はクールビズだって騒いでいるのに、堅苦しいスーツに身を包んだ天気予報士が淡々とした口調で今夜から雨が降り始めるって言うてたっけ。

覆い被さっている男の指先に散々狂わせられながら、真っ白になる寸前の頭でそんなことを思った。

カーテンを開けっ放しにしている所為か、暗い部屋の中には外灯の灯りがぼんやりと入ってくる。その僅かな光りに浮かぶ男の肩の向こうに、私は雨で歪んだ景色を見た。

視界が歪んでいるのは雨のせいだけじゃないのかもしれないけれど。

2人分の重さでベッドは鈍く軋んだ。男の端正な顔に落ちた前髪が首筋に当たって少しくすぐつたい。

身体の線をなぞる指先も、鎖骨を這う舌もまるで私の反応を楽しんでいるかのようにゆっくりと時間をかける。もどかしくて、もっと触れて欲しくて私の口からは甘い声ばかりが零れる。

どんなに求めても、結局は無意味だということは私が一番よく知ってる筈なのに。私は馬鹿みたいに男の背中に爪痕を残し、何度も何度も名前を呼ぶのだった。

「京っ…京介っ！」

奇妙な関係だ。私と京介は決して付き合ってるわけじゃない。

ただの職場の同期 だった。ほんの半年前まで。それがいつの間にかこうして、時々思い出したように抱き合って一時の熱を共有す

る仲になっていた。
場所は色々、京介の部屋だったり私の部屋だったり。時々ホテルも使うことがある。

きっかけなんてどうでもいい。ただその瞬間、京介には私が必要で私には京介が必要だった。それだけのこと。

「紗江」

京介の声は甘い。低く突き上げてくるような響きを持ち、その度に心が震える。

京介に名前を呼ばれると、何故か自分の名前が特別な意味を持ったような気がするのだ。

身体だけの関係だなんて、友達はみんな変な顔をする。そんなの私
が傷つくだけだって口を揃えて止めようとする。

だけど私は今の関係が丁度よかった。少なくとも京介の隣は心地い
いし、私を最高の快楽に連れて行ってくれる。

付き合っているわけじゃないから、余計な不安はないし自分の時間を大切にも出来る。

それってとっても楽なんじゃないか。

欲しい時にケータイのボタン一つで繋がる関係。面倒なことは一切なしにして、お互い気持ち良ければそれでいい。

なんて。私は大嘘吐きだ。

今日何度目かの絶頂を見て、京介はゆっくりと離れていく。さっきまであんなに熱いと感じていたベッドの中は、一瞬で冷たくなった。ベッドの傍にある簡易テーブルの上には安いライターと一本だけ箱の中に残った煙草。

京介は情事の後に必ず煙草を一本吸う。いつもよりも長く、時間を

かけて。

手の中で炎が揺れたかと思うと、薄らと明るい室内に白い煙が上った。

まるで今の私たちと同じだ、と心の中で自嘲した。

どこまでも不安定で、頼りなくて、どこかに辿りつく前に簡単に消えてしまう。掴もうと必死になって手を伸ばしても、手の中に残るのは何も無い。

「あーあ。紗江の所為で背中、痛え」

「そんなに引つ掻いた覚え無いもん」

「自覚ないってのが一番やっかいだよな」

こちらに背を向けて煙草を吸う京介の背中に指を這わせた。

私がつけた爪痕は、いつまでこの夜を思い出させてくれるのだろうか。明日？明後日？それとも京介がこの部屋を出てしまった瞬間に、全部夢にしなきゃいけないのだろうか。

京介はずるい。

私の心に消えない想いを残しておきながら、何も無いように振る舞える。身体だけだなんて言いながら、一番それに納得していないのは私なのだ。

こんな醜い部分を知られたくなくて、私は偽りの仮面を被り続ける。まるでこういう関係に慣れているかのように。

「もうこんな時間か。俺明日早いんだ」

「帰る？」

「ああ」

時計の針が12時を指し、京介は短くなつた煙草を灰皿に押し付け

た。

お互いの家に泊らないのは恋人同士じゃないから。安眠の地は別々に持つというのが始めに決めたルールだ。

京介も私も車を持っているから、どんなに遅くなっても必ず帰る。ベッドから出た瞬間に私たちはただ同じ会社に勤める者同士に戻り、重ねた肌のぬくもりを忘れる。

先ほどまでの余韻をまだ引きずって動けない私に背を向け、京介はフローリングの上に散らばった衣服を身につける。ワイシャツもネクタイもくしゃくしゃのままだけど、車で帰るぶんには何ら問題ない。

大学生の頃からジムに行くのを習慣にしているというだけあって、綺麗についた筋肉が京介の動作に合わせてしなやかに動いた。

私の視線は京介の体を追う。

黒い髪、精悍な横顔、薄い唇、私を簡単に抱き上げる逞しい腕、的確に私を狂わせる指先、締まった腰。

これら全てに5感が引きつけられ、快樂の底に墮とされる。満たされるまで求められ、離される。

そういう抱き方を、この人はする。

私以外に何人の人を抱いたんだろうか。

私以外の何人がこの人の抱き方を知っているんだろうか。

そう考えるだけで胸の奥がチクリと痛んだ。

どうして好きになっちゃったのかな。苦しむのは分かってた筈なのに。

京介の手が私の頭を撫でる度、京介の唇が私んの名前を紡ぐ度、自分じゃどうしようもなくなってしまう。気持ちをしまっておく為の鍵は簡単に壊れ、堰を切ったように想いが溢れてしまう。

それが段々限界に近付いていることは嫌でも分かった。

それは私と京介の「約束」の終わり。

京介は私を簡単に手放すだろう。指に持った煙草の火を消すみたい
に、一寸の躊躇いもなく。

例えば私が冗談でも「終わりにしよう」と言ったなら。その時私た
ちの関係はあっさり終わってしまう。

もしも京介に好きな人が出来たとき、誰かにこの関係がばれたとき、
私が苦しさに耐えられなくなったとき。

ピリオドの要素はそこら中に溢れているのだ。

それが明日なのか、一週間後なのか、一ヶ月後なのかは分からない
けど。

確信のない「いつか」を、私は心から恐れている。

「じゃあ。また電話する」

「うん」

なんて呆気ない夜の終わり。ここに来た時と同じようにきつちりと
スーツを着た京介は、その言葉だけ言うと一度も振り返らずに部屋
を出ていった。

外から鍵を掛ける音がして、コトンとポストの中に鍵が落とされる。
これも2人で決めたルール。決してお互いの部屋の鍵は持たないこ
と。

一度大きく息を吸って、また大きく吐いた。

いつの間にか涙が溢れ、未だうっすらと熱を残しているシーツに雫
が落ちる。

悲しくて、苦しくて、惨めで、そしてたまらなくあの人が愛しくて。
息を止めて涙を飲み込もうとしても、小さく零れる嗚咽。

私が流す涙の意味を、京介は知らない。

好きと言ったところで何かが変わるんだろうか。その変化は、私が望んだ未来になるんだろうか。
ううん、きつと終わりに近づくだけ。だったら私はこの涙を何度でも飲み込む。苦しくて、泣き喚く心に蓋をして、無意味な夜を越える。

少しでも長く、京介の傍にいたい。

ホントはいつも壊れそうなくらいに悲しいのに。

*

おもいつきり泣いてしまった所為か朝からひどい頭痛がした。顔色もあまりよくなかったようで、隣のデスクの先輩が何度も心配そうに体調を聞いてきた。

午前中は笑顔で「大丈夫」だと返せたけれど、午後になってそれも出来なくなつた。

今は笑うのですら苦痛なくらいに頭が痛む。額に手を当ててみると僅かに熱もあるみたいだ。

仕事も残っているがこれ以上無理をして、倒れるようなことがあればそれこそみんなに迷惑がかかる。おもいきって部長に早退を申し

出ると、以外にも快く承諾してくれた。
どうやらそれほど私の顔色は悪かったらしい。

ダメだな。こんなことで体調を崩すなんて社会人失格だ。京介の事は割り切らなきゃいけないのに、ちゃんと出来ていない。

京介のデスクの方に視線を向けてもそこに彼はいない。今日は外回りだって聞いたから、夕方にならないと会社には帰ってこないだろう。

バッグに必要なものを詰め、周りのみんなに迷惑をかけることを謝って会社を出る。

車を運転するのも何だか億劫に感じてしまい、タクシーを呼ぼうか迷った。一刻も早くベッドの中に入って眠りたい。

「清水！」

そう呼ばれて後ろを振り返ると、さっきまで隣で仕事をしていた先輩が走ってくるのが見えた。

「よかった。まだ帰ってなかった」

「あの、何かありました？」

必要な事は全部紙に書いて貼っておいたんだけど、熱の所為でどこか抜けてたのかもしれない。だったら大変な迷惑をかけてしまった。そう思ってたら先輩は違うと言って笑った。

「今から用があつて隣街の方行くんだけど、確か清水の家そっちだったよな？ ついでだから乗ってけ」

「いえ、悪いんでタクシーで帰ります」

「残念。部長命令。逆らったら俺が怒られる」

強引に手を引かれてしまったけれど、正直とても助かった。今はタクシーが到着するまでの時間すら辛いのだ。
楽なようにと後ろの席に乗せられ、私はシートに体を沈めた。
エンジンのかかる音、アクセルを踏む音。それらすべてが何故か心地よかった。

関節がぴりぴりと痛いから更に熱が上がるんだなと憂鬱になっていた時だ。

今まで黙っていた先輩が急に口を開いた。

「熱は？」

「多分、少しずつ上がってきてるんだと思います」

「一人暮らしだっけ？平気なの」

「はい。薬はあるので大丈夫です」

「へえ」

カチ、カチ、とウインカーの音が一瞬だけ沈黙の落ちた車内に響いた。

体を倒している所為で、私からはハンドルに手を置く先輩の左手しか見えない。京介のよりもずっと細い人差し指はリズムを刻むように上下に動いていた。

先輩は京介とはまるで正反対だ。茶色に染めた髪は優しそうな雰囲気合っているし、ワイシャツも爽やかなブルーがよく似合う。人懐っこい先輩の笑顔は営業先でマダムに人気だって聞いた。

京介は 目を閉じて彼を思い出す。瞼の裏に張り付いてる記憶は簡単にそれを具体化出来た。

京介はどちらかというワイシャツよりもネクタイや時計にこだわる人。色が付いているものよりもシンプルで機能性を大切に作る。顧客も女性よりは男性だ。

ああ、ダメだ。熱で涙腺がいつもよりも弱くなっているのかもしれない。途端に視界が曇り、涙を流さないように何度も瞬きした。

「清水」

沈黙を破ったのは先輩だった。柔らかい声色はいつもと同じの筈なのに、何故か緊張を孕んでいるような気がして。それに応える私の声も自然と固くなる。

「はい」

「あの、さ。清水と河合京介って付き合ってたの？」

「え？」

「や、なんとなくなんだけど。そんな噂聞いたから」

噂になっているのは初めて聞いた。何しろ私と京介は会社にいる間は必要最低限のことしか話さないからだ。

体を重ねる日ですらバラバラに帰り、誰かに見られたことなどないと自信を持って言える。

そういう関係とお互い分かっているからこそ、細心の注意を払って今までやってきた。会社の人間にばれては、それこそ面倒なことになるかねないからだ。

「付き合ってますよ。ていうか、どこからそんな噂が出たのかわかりません」

嘘は言っていないから不自然な感じはしないだろう。案の定先輩も何の疑問も持たずに私の答えを受け入れた。

車の振動が気持ちよくて私の意識は少しずつ沈んでいく。窓からの景色が見慣れたものへと変わってきたのが見えて、自分のアパートの近くまで来たのだと悟った。

あと少しで自分だけの空間に戻る。
そうしたら熱い紅茶を飲んで、ベッドに入ろう。夢の中にいる間は、
京介の事で苦しまなくて済む。

「先輩、その信号曲がったらすぐなのでそこで降ろしてください
か？」

「ああ。大丈夫？」

「はい。ありがとうございました」

信号を曲がってすぐの、車が2台ぎりぎり通れるかというくらい
の細い道。先輩に車を止めてもらい、いつもよりも重く感じる鞆を持
ってドアを開ける。

昨日の雨の残りか、道路に僅かな水たまりが出来ていた。

「清水」

「はい？」

「あのさ、今誰とも付き合っていないんだったら、俺と付き合っ
てくれないかな？」

先輩の声に、心臓が止まりそうになった。

冷たい指 - 2

「ごめんなさい」

その一瞬の沈黙は、遠くで聞こえるクラクションの音でさえも掻き消した。先輩の目が驚きで見開かれ、その黒い瞳に私の泣きそうな顔が映る。

先輩の告白も突然だったけれど、私も充分それに匹敵するだろう。ただ言葉は考えるよりも早く口から零れていた。

例えばあたしがここでイエスと言ってしまふのは簡単だ。嬉しそうに笑って頷けばいい。そしてあたしは愛されることを知るだろう。だけどそれが幸せかどうかは別の話。先輩と付き合って、愛されても私は京介を想う。

どんなに温かい腕で抱きしめられても、京介の冷たい指先を思い出す。

狂いそうなくらいに抱かれても、きつとあの煙草の匂いが堪らなく恋しくなる。呼吸をする度、目を瞑る度、私は全てに京介を感じるのだろう。

そんなの虚しいだけ。気持ちのない付き合い方がどんなに辛いか、私は一番よく知っているのだから。

「考えることもしてくれない？」

「…ごめんなさい」

「まいったな…まさかこんなに早くフラれるとは思ってなかった」

困ったような笑顔を浮かべた先輩の口調はしかし、とても穏やかだった。まるで何もかもを包んでくれるあたたかい光のよう。

私の頬には知らず知らずのうちに涙が零れていた。

先輩になら、言ってもいいんじゃないかって。この胸の奥にある誰にも言えない想いを吐きだしてしまってもいいんじゃないかって。そんな卑怯な考えばかりが浮かぶ。

「好きな人が、いるんです」

それは小さな告白だった。下手すればエンジン音に溶けてしまいそうな程の呟き。

「どうしようもなく好きなんです。叶わないかもしれないけれど…今は想ってるだけで精一杯なんです」

京介の前で言えなかった言葉を先輩の前で吐き出す。醜い欲の羅列は次々と形になって、そして呆気なく消えていく。

震える声も、後から後から流れる涙も止められるのはたった一人だ。それは今、優しく私の名前を呼んでくれる人じゃない。強引で、身勝手に、冷たい指先を持つてるアイツだけなのだ。

だから先輩。ごめんなさい

そう繰り返す私を、先輩は一度も責めなかった。ただ分かったと一言言って、最後にはいつもの笑顔で体調の心配までしてくれた。

部屋の鍵を降ろすのと同時に、静かに車が去る音が聞こえた。

どうしようもなく体はだるくて、思考回路もぼうつとしておかしくなっている。のろのろとパンプスを脱ぎ、スーツのままベッドへ倒れ込んだ。

色々なことがあり過ぎてもう何も考えたくないのに、ベッドに残った僅かな京介の残り香がそうはさせてくれない。終わりのない迷路の中に迷い込んだみたい、だなんて自嘲気味に笑った。

もう、限界だ。そう思った時妙に自分の中で納得してしまった。

ああ、私は結局自分自身を偽り続けることなんてできないんだって。どうやったって京介を嫌いになることなんてできない。例えそれが一番楽な方法だとしてもだ。だけどこれ以上自分の気持ちを押し殺して都合のいい女を演じることまでできない。だっただらいつそ、彼を好きなまま離れてしまった方がいい。京介はすぐに私の代わりを見つかるだろう。

絶え間なく痛む頭を片手で抑えながら、慣れた手つきで京介のアドレスを呼び出す。件名、河合京介。タイトル無し、たった二行の本文。

”もう連絡しないで欲しい。今までありがとう。さよなら”
なんとも素っ気ない終わりかただとも思ってたけれど、最初から嘘で固めた関係に余計な飾りなどいらなのかもしれない。

京介にメールを送る時はいつも緊張してなかなか送信ボタンを押せなかった。それは別れの言葉を綴った今でも同じこと。躊躇うようにボタンの上を親指で軽く叩いては離し、また触れては離しを繰り返す。

好きだった、どうしようもないほどバカみたいに。だからこのままじゃいられない。

目を瞑って送信ボタンを押し、私は思考を夢の中に沈めた。

*

そうしてどれくらいの間が経ったのだろうか。ふと目を覚ました時には外はすっかり暗くなっていた。

体のだるさも幾分かましになり、頭の痛みはすっかりとれていった。傍にあったドレスサーを覗くととてもじゃないが外を歩けるような恰好じゃなかった。着替えもせずにベッドへ倒れ込んだ所為でシャツは変なところに折り目がついているし、髪はぼさぼさ。吐きだした涙の代償は赤く腫れた瞼。

このままじゃ夕飯を買いに行くこともできないだろう。幸い簡単なレトルトは常備してあるし、今日ぐらいは自炊しなくてもバチは当たらないはずだ。

手櫛で簡単に髪を直し、スカートとワイシャツは脱いでラフなルームウェアに着替える。

さすがに喉の渴きを覚え夕飯の支度ついでに水でも飲もうかとキッチンノドアを開けた時だ。ほのかな外灯に照らされ、キッチンの小さな窓から黒のシルエットと白煙が立ち上っているのが見えた。

まさか、と思うよりも早く足音に気付いたのか黒い影がこちらを向く。

それが誰かなんて考えるまでもなかった。よく知る髪型、肩幅は間違いなくアイツだ。

「紗江、起きてんだろ？中に入れる」

一見、命令にも聞こえる声はひどく懇願しているようにも聞こえた。

「中に入れてくれ、頼む」

私が戸惑って言葉を失っているともう一度、京介は言った。先ほどとはまるで違う弱弱しい口調で。

ダメだよ、もう終わりにするって決めたじゃない。

その頭では何度も自分に言い聞かせているのに、私はまるで吸い寄せられるかのように玄関へ向かいゆっくりとチェーンを外し、ドアを開けていた。

僅かな隙間から覗く京介は逆光で表情まではよく見えない。

「なん、で…」

来たの、という言葉は京介の胸の中に消えていった。狭い隙間に強引に体を滑り込ませ、そのまま強い力で抱きしめられたからだ。

服に染み付いた煙草の匂いが夜風と共に鼻孔を撥る。

やめて、と口に出すよりも早く塞がれる唇。今まで寝てた所為で熱を持っていて私のそれとは正反対に京介の唇は冷たかった。

その冷たさが熱さに代わるまでにそう時間はかからなかった。触れる唇が、背中に回された力強い手が全てを狂わせる。決めた筈なのに、もう終わりにしようと思った筈なのに、京介は指先一つで私の唇を破る。

「やめて……」

止めないで。

「もう関係ない。終わったの、私たち」

このままずっと離さないで。

言葉と心はまったく別のことを思う。まるでそんな曖昧な心の中を見透かしているように、京介の手に力がこもる。

狭い玄関でどれくらいそうしていたらどうか。荒々しかった心臓の音が凧ぎ、優しく耳の奥を打つ。

「…なんなんだよ、一体」

吐息のような掠れた声。京介が強く握った所為で、ワイシャツが背中の方だけ不自然にくしゃくしゃになる。

「もう連絡すんな？今までありがとう、さよなら？フザケんな」

「きょう、」

「勝手すぎんだろ…俺がどんな気持ちで…」

途切れ途切れの言葉に私の頭は混乱する。

どうして京介はこんな切ない声で私を抱きしめるのだろう。どうして放っておいてくれないのだろう。

頭の中を何度も巡る疑問符は尽きることがない。

だって私はさよならって言った。もう連絡しないでと言った。それはイコールでこの関係の終わりを意味するんじゃないだろうか。

じゃあ一体どうして

「どうして今なんだよ。やっとお前のこと大切だって気付いたんだ。簡単に終わらせるわけにはいかねえだろ」

今度こそ完全に思考が停止した。

驚いて顔を上げると真剣な表情で私を見下ろす京介がいた。

「好きだ。好きなんだ、紗江」

嘘。だって…だって京介と私は…

突然つきつけられた現実に言葉が紡げない。

信じられるわけがない。今までの関係があまりにも長過ぎたのに。

京介は一度だってそんな素振りを見せなかったし、私だって必死に

隠してきた。

だけど京介の瞳には迷いは一切ない。ただ真っ直ぐに私を見つめて繰り返す。
好きだ、と。

「だから紗江、お前も俺を好きになれよ」

離れていた唇が、再び熱を重ねる。

離れては引き合い、そしてまた同じ体温を共有する。

僅かに開いた距離がもう一度ゼロになったら、その時私は彼になんて言うのだろう。

とっくに好きだった？勝手なのは京介じゃない？それとも涙で言葉になんてできないのかな。

そんなことを思いながら私は降ってくるキスに目を閉じた。

冷たい指 - 2 (後書き)

リクエストを下さった涼さま、そしていつも来てくださる方に感謝
を込めて*

一周年ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2432u/>

恋愛小説

2011年7月25日19時18分発行